

# 被災地及びみやぎ生協震災学習資料室視察ツアー 参加報告

組合員活動委員 中田・川端・山口

## ●東日本大震災から2年

現在の被災地は少しずつ町並みが戻りつつありますが、未だ傷跡が残る箇所は多々ありました。

遠く離れた場所に住む私たちも、あの日を忘れてはいけません。

そして、未だ悲しみと闘い、立ち上がろうとしている人達・前を向いて歩こうとしている人達を私たちはこれからも応援していきたい。

## ●みやぎ生協主催「3.11を忘れないつどい」に参加

みやぎ生協の職員16人も犠牲になりました。

本人は無事でも、家族を亡くした職員、自宅が全壊・流出した職員もたくさんいました。

つらい環境の中、みやぎ生協はこの2年間、前を向き、頑張ってきましたが、被災された人達の心は未だ癒されてはいませんでした。

## ●被災地視察 仙台市荒浜～名取市閑上～南三陸町～石巻市

被災地に入ると、住宅はほとんど残っておらず、遠くの海まで見渡せるほど、辺り一面更地になっていました。家が残っていると思ったら、一階は全て津波で押し流され柱だけとなった痛々しい家屋で、とても異様な光景でした。

名取市閑上地区では、被災した人達があの日避難したであろう日和山に登り、そこに立ち、町を見ると、360度、家は一軒もなく、無残に残された建物の土台だけが限りなく広がっていました。

町を一望できる日和山には慰霊碑が建てられ、たくさんの花束が手向けられていました。土台だけになってしまった家々には花束が置かれ、手を合わせる人々の姿がありました。その上には、まるで何もなかったかのように限りない青空が広がっていて、本当に切なく感じました。

たった一日で町が消え、全てが失われ、言いようのない現実がそこには広がっていました。

南三陸町ではテレビ報道でも目にした防災庁舎が、また、石巻市では津波後の火災で全焼した小学校が無残な姿で残っていました。

どちらの建物も、本当に無残な姿で、津波の恐ろしさを感じさせられたと同時に、本当に言葉がない、胸がつまる想いで被災地を視察しました。

「この建物を残し、将来、この大震災を忘れないようにしよう」という思いと、「この建物を見るとあの日を思い出すから取り壊してほしい」という遺族の思いで、現地行政は答えが出せずにいるそうです。

## ●志津川仮設かき処理場 見学

津波で甚大な被害を受けた志津川のかき養殖業。被災後の絶望的な環境の中、みやぎ生協をはじめ、多くの団体からの支援を受け、仮設のかき処理場ができ、少しずつですが、かきの生産が再び行えるようになっていました。

しかし、処理場へと続く港の岸壁は壊れたまま、船が自由に安全に航行できる環境ではありませんでした。まだまだ復興支援は必要です。被災地の人達が前を向いて歩ける環境にしてあげなければと強く思いました。

わずかに残った家屋は全て  
一階が津波で流されていた。

町には、たくさんの花束と  
青い空だけが広がっていた。



## ●全国の生協が被災地を応援した

被災直後から、みやぎ生協には、全国の生協から励ましの言葉がたくさん届き、被災地は孤独ではありませんでした。

つらいとき、助けてくれる生協の仲間が日本中にいました。

もし、私たちが困ったときも、きっと全国にいる生協の仲間が助けてくれるでしょう。

生協とは、そういう組織なんだと心から実感しました。

## ●組合員のために店を開けたみやぎ生協「蛇田店」

被災後、雪が降る寒さの中、食べ物や日用品を求め、お店の前には多くの人が列を作りました。

みやぎ生協は、被災したその日の夕方から、組合員のために、店の営業を再開し、周りの店が高値で物を売る中、破格の安い値段で組合員に食べ物や日用品を提供したそうです。

また、宅配では、被災した地域を回り、組合員の安否確認をし、食料を届けたそうです。

この行動に、どれほど多くの組合員が救われたことでしょうか。

組合員を思い、とった行動。生協職員を誇りに思います。そして、生協の組合員でよかったと思う瞬間だったと思います。

## ●東日本大震災を忘れない

震災後、みやぎ生協は東日本大震災を忘れないため、みやぎ生協敷地内に「東日本大震災学習・資料室」を作りました。

3月11日のみやぎ生協周辺の被災状況、被災直後のみやぎ生協の動き、そして、被災後、全国の生協から寄せられた支援の内容や励ましの言葉・品々が展示されています。

そして、みやぎ生協がこの震災から学んだこと、この震災を教訓としたこれからの取り組みなどが分かりやすくパネル展示されています。

## ●教訓

震災の教訓の一つに「ガソリンスタンドの設置」が挙げられます。

震災直後、組合員のもとに支援物資を運ぶのに、物品とそれを運ぶトラックはたくさんありましたが、トラックを動かすガソリンが手に入りませんでした。

また、震災時3月でまだ寒かったにもかかわらず、暖をとるための灯油が不足し、被災した人達は寒さに耐えるしかありませんでした。

その教訓から、みやぎ生協は、敷地内にガソリンスタンドを設置し、災害時、再び悔しい思いをしないようにしたそうです。

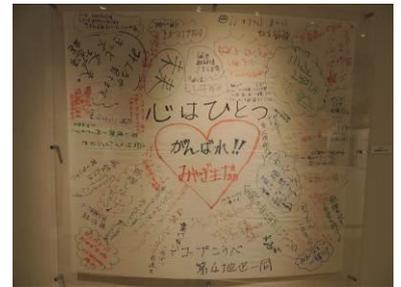
この取り組みは、全国の生協が見習うべき行動ではないでしょうか？

みやぎだけの話ではありません。災害はいつどこで起きるかわかりません。

仲間が受けた思いを、私たちも一緒に受け止め、これからの教訓として活かしていかなければならないと思いました。

## ●これからも被災地を支援していきましょう

2年経った今も、被災地の人達は頑張っています。私たちも東日本大震災を忘れずに、被災地の仲間とともに、一緒に復興の道を歩んでいきましょう。



\*下の写真は、被災後、被災地の人達が立ち上げた手作りの仮設商店街の中の一つのお店に貼られていた一枚のメッセージです。

私はこの言葉から、被災地の人達の強い決意を感じました。

あの日の悲しみを乗り越え、前へと進もうとしている被災地の人達を、私たちはこれからも変わることなく支援していくことが必要ではないでしょうか。

